

# 東亜同文書院大学呉羽分校顛末

——海を渡れなかった書院生たち——

## 池上貞一

司会 時間になりましたので、ただいまから池上先生のお話を聞かせていただきます。私は司会を務めます越知でございます。「海を渡れなかった書院生たち」という何かユニークな副題で、どんなことだろうなというふうなイメージが湧くと思います。今日は雨の中を皆さんたくさんお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。それではまず最初に藤田佳久センター長のご挨拶をお願いします。

藤田 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきましたセンター長の藤田と申します。愛知大学東亜同文書院記念センターが昨年より文科省のオープン・リサーチ・センターに選定されました。元々ずっとやってきた活動があるんですが、それにさらに輪をかけていろいろな啓蒙活動、あるいは研究会活



動と、幅広い分野でいろいろな行事を催すことになりました。運営していくのになかなか忙しいんですが、今日は多くの皆さん方のご協力を得て、せっかくのチャンスですので東亜同文書院時代のこと、あるいは書院が引き揚げてきたあとの愛知大学との関わりなど、多面的な範囲で、いろんな観点からお話を伺い、研究会を持ち、あるいはさらに今後研究を進めていく手続きをとっていきたいというようなことを考えております。

今日の池上先生のお話は「海を渡れなかつた書院生たち」です。私も東亜同文書院大学の研究を始めた頃、いろいろあちらこちらの現場を見に行きました。私は元々地理学をやっているものですから、どうしても現場の臨場感がないとなかなかイメージできないところがあります。呉羽分校は富山県にありましたが、戦前は呉羽紡、戦時中は飛行機を作る会社になったそうです。ちよつとだけ地理学的に話しますと、富山県は真つ二つに東西に分かれています。日本海から南のほうに向かつて真中に小さな丘陵（呉羽丘陵）があり、その東が呉東と称され富山市が中心都市、西が呉西と称され高岡市が中心都市です。西側は加賀藩ですね。富山のある東側が富山藩。これは新しくできた、地域としては氾濫も多くそれほど豊かではなかつた地域だったんですが、明治維新直後富山県がまとまった時に、県庁が富山市に置かれます。それまで伝統的に強かつた高岡市は全国の鐘を作っていますが、そちらは県庁所在地になれなかつた。ですから両方の都市が、かつての長野市と松本市のように一つの県の中で競い合っている。長野県ではお互いに県庁所在地をあっちにやったりこっちにやったりして、その度に火を付けて燃やしたりというすさまじいことがあります。富山県もいろいろと競争をしていますが、最近はどうも富山市のほうが方がいいようです。

ちよつとその真中に呉羽丘陵があつて、それで名前を付けたのが呉羽紡です。最後東支那海を渡れなかつ

た東亜同文書院四六期生が、その社長さんの伊藤忠兵衛氏の厚意で工場の建物を借り呉羽分校として学ぶことになります。池上先生はそういう時代からの関係者でありますし、戦後愛知大学でもずっと先生としてご活躍をされた経験の持ち主です。そういう点では前からぜひお話を伺いたいと思っております、ようやく本日実現いたしましたので、いろいろなお話が聞けるのではないかと楽しみにしております。ぜひ皆さんご清聴いただければ大変ありがたいと思います。簡単ではありますがご挨拶とさせていただきます。

**司会** ありがとうございます。呉羽と言うとやはり呉羽紡績は分かるんですが、どういう意味であるいは東亜同文書院とどういう関係があるのかということを、今藤田先生が大変丁寧に説明され、地理学の先生で理学博士の藤田先生はやっぱ言うことが違うと。これで呉羽が分かったと思います。呉羽が分かったところで呉羽分校の真髓を今から池上先生にお話し願うわけですが、その前に愛知大学の非常勤講師でポストドクターの武井義和先生から、池上先生の略歴をご説明させていただきます。

**武井** 武井でございます。よろしくお願いたします。池上先生の略歴については、お手元にあります資料④の略歴を読ませていただく形で紹介させていただきます。

池上貞一先生は一九一八年（大正七年）八月二〇日、愛知県でお生まれになりました。一九二三年から一九三三年までは中国北部の青島で、そして一九三三年から一九三九年までは同じく中国北部の天津でお過ごしになりました。一九四二年（昭和一七年）三月、東亜同文書院大学予科を二年で中退されました。一九四五年（昭和二〇年）七月、東亜同文書院大学臨時講師として翌年一月までお勤めになりました。翌昭和二二年、愛知大学予科講師を勤められましたあと、一九六一年（昭和三十六年）には愛知大学法経学部教授に就任

されております。その後一九六九年（昭和四四年）一二月には法経学部長、一九七六年（昭和五一年）七月には図書館長、一九八五年（昭和六〇年）五月には中国学术交流委員会委員長を歴任されております。一九八八年七月から一〇月までの三か月間、中国へも留学されております。その翌年一九八九年（平成元年）三月三十一日に愛知大学を定年退職されました。翌四月一日、名誉教授とられました。以上でございます。

**司会** ありがとうございます。以上が池上貞一先生の略歴でございます。実は先週愛知大学の研究支援課のほうに池上先生のご子息からお電話がありました。そしてそれを受けたのが研究支援課の主幹、山本さんです。どういうことかと言いますと、「父が講演をするということだが、どういう会場でどういう人数でという講演をするのか」というようなお問い合わせだったそうです。今先生のお年を聞くと八月二〇日で満八九歳になられた。すでに米寿をすまされておられ、おめでとうございます。そういうことからやはり心配で山本主幹のところに電話をされた。「心配要りません」と。「今日の講演会は本当にホットな感じで、愛知大学を愛し、東亜同文書院を愛する人達の集まりですから、気軽にやっただけです。すでに資料などを今泉先生が用意されています。ですからご安心ください」と山本さんがお答えになったそうです。先生のお耳には人ついていなかったようですが、ご子息の、子供が親を思う気持ちが表れております。今日は中日大辞典編纂所の主幹であり、同文書院のことについては右に出る人がいないというぐらいで、啓蒙と言うかそういう運動もされている今泉潤太郎先生がお側におりまして、池上先生のお話を盛り上げるようですので、楽しみながら和気藹々のうちに一〜二時間を過ごしたいと思えます。先生は八九歳になられますますますご健康であります。皆さんからあとでご質問をお受けすることもあります。その場合もちやんと今泉先生がそこ

にお控えになっておりますので、安心して充分に呉羽時代の東亜同文書院についてお話しいただきたいと思  
います。では先生お願いいたします。

池上 たいま紹介をいただきました池上です。息子も私がいつたいどんな話をするかと心配しているわけ  
ですが、まあそういうわけで何を話すか、あまり自信はありませんけれども、この当時のことを知っておら  
れる方も少ないものですから、少しは役に立つかと思つて話をさせていただきます。

私は豊橋で生まれたんですけれども、父が第一次大戦後青島に行きましたので、小さい時からずっと青島  
で過ごしました。日本の小学校を出た時に、たまたま小学校を出たか中学一年ぐらいを終えた者を中国の学  
校に入れて中国をよく知る日本人を養成しようという制度が外務省にできました。最初は満州とか青島と  
か、外地にある日本の小学校を出た連中が推薦されて、天津の中日学院（天津同文書院と言つていたと思  
います）という、日本の東亜同文会の経営している中学・高校を一緒にしたところへ入学する。私もこれに推  
薦されて行くことになっていました。その日本人の責任者が青島へまいりまして、私ともう一人、もう一  
人の者は体も大きいし健康そうですから天津のほうへ行つたんです。私は体が小さいだけではなくて、あま  
り病気をしたことはなかったんですがちょっと弱そうに見えたのか、青島で中国の学校へ行けと言われまし  
た。天津へ行つた者はちゃんと日本人の責任者もいて、きちんと中国語も習いましたけれども、私はただ青  
島へ行けと言われただけで、あと何もしてくれなかったもので、その点ではかなり苦労しました。青島の中国  
の学校に二年いて、それから父が内地へ帰つてきたので、ようやく天津の学校にかわつたわけです。

天津の中日学院の途中で一年病気で休みましたけれども卒業し、今度は外務省のほうで上海の同文書院に

行けと言われて、同文書院に行つて、また肺浸潤ですか胸がちよつと悪くて、結局内地へ帰り療養所に入つて休学しました。そのまま二年が過ぎたので除籍になり（同文書院の休学は二年までなのです）その療養所であと嘱託をやったりして、それからまた同文書院が内地へ来て富山で分校を開いた。そこから中国語の教員をたのまれて終戦となります。その後、同文書院は廃校となり、ちょうど豊橋の予備士官学校のあとが空いたので、そこで愛知大学がやることになりました。私の天津時代の一年後輩の者がすでに同文書院の先生をやっていたんですが、彼は東京の人間で、内地へ帰つて東京の法政大学へ勤めた。中国語の教員が足りなくなつて、私に「来い」というものですからちよつどいいと思つて、愛知大学に勤めさせていただいて、まあいろいろありましたけれども、どうにか定年を迎えて、その後は割合体も元気で今日に到っているわけです。

話が横道にそれましたけれども、「東亜同文書院大学呉羽分校顛末」という題ですが、もとへ戻しますと、私は今言いました天津の学校を出て上海の同文書院に行つたんですが、天津時代からちよつと胸をやつていて、同文書院に行つてもまだそれが悪かつたので、愛知県の大府の療養所にずっといたりしたわけですが、同文書院の先生は上海におられまして、若干の先生が内地に帰つておりましたけれども、分校は中国語の教員が足りなかつたので「お前来い」ということになり、あまり自信はなかつたんですけれども呉羽に行かせていただいたわけです。

そういうことで同文書院の呉羽分校の話をせよということなんですが、なぜ呉羽紡績に同文書院が行つたかと言うと、呉羽紡績の副社長が書院の先輩で、そういうこともあつてそこに新入生が行かせてもらったわ

けです。その頃は終戦のちよつと前で、ご承知のように食糧事情が悪く、食堂（学生も教員も一緒です）に行つて食事をする時、入れ物にちゃんと食事が入っているんですが、我々教員も少し多いのを選んで取つて食べるような状態でした。呉羽に行つてすぐ、翌日ぐらいでしたか富山が空襲されました。従つて学生達はすぐ動員され、富山に行つて空襲の後始末をしたりしましたし、私は現場には直接行かなかつたんですけれども、富山の側の川の辺では亡くなつた死体を焼いたりしておりました。

ちよつと呉羽紡績には伊藤忠の社長がおりまして、二回ぐらい私も呼ばれました。そこでは期間が短かつたので、主に中国語をやり、あとは勤労働員です。呉羽紡績では翼なんか木製の飛行機を作っていました。飛んだわけではありませんが。八月に陛下の話を呉羽紡績の庭で聞きました。あまりはつきりは分かなかつたんですけれども、どうやら戦争が終わるといふ内容だと聞かされ、それで我々教員も学生も、それぞれ自分の郷里のほうへ帰つていったわけです。しばらく経つてからまた呉羽で学校を開くということで学生が集まつてきたり、在学途中で兵隊に行つていた連中も帰つてきたりして、一応解散していたのがまた一〇月か十一月に呉羽に集まつてきたんですが、マッカーサー司令部のほうから、同文書院は中国に対して良くないことをしていた（「侵略」といふ言葉は使つておりませんが）といふ言い方をされ、結局同文書院は閉校、解散になつたわけです。本来の先生方は幸い東京の本部にいくらかお金があつたので退職金などをいただいたんですが、私は臨時の教員ですからそういうものは全然いただきませんでした。

東京に同文書院を經營していた東亜同文会の本部があり、そこがアメリカ軍に接收されるということがありました。それは仕方がないけれども、東亜同文会にかなりの本がありまして、アメリカ軍は別にそれを無

理に接收しようという意図はなかったようですけれども、取られてはかなわんというので私なんかも行って、同文会本部にあった本を、牧田先生という同文会の監事の方の家に運ぶため、トラックに乗せるのを手伝った覚えがあります。

さつきも言ったように終戦直後に一度解散して、また集まったんですけれども、同文書院は良くないというところで結局本格的に解散してしまいました。呉羽分校では授業も主に中国語だけで、期間もそう長くなかったので呉羽の思い出はそれほどないんですが、伊藤忠兵衛さんも呉羽にちょうどいて、二、三回昼食かなんかに呼ばれたことがあります。昔蒙古のほうにいて、商売でいろいろ苦労したというような話をしてもらいました。

その後はご承知のように豊橋の、今愛知大学のある予備士官学校のあとが空くので、そこへ同文書院の代わりの愛知大学を作ろうという話になりました。ちょうど神谷龍男先生という愛知県出身の同文書院の先生が内地にいましたので、その方がいろいろ活躍され、豊橋市も応援してくださって、愛知大学が今の場所にできました。最初は京城帝大とか、満州国にあった日本のいくつかの大学の学生や教員も集まっていたんですが、京城帝大から来た先生方はちょうど名古屋大学に経済学部ができることになって、引き抜かれたと言いますか、何人かが名古屋大学のほうに行っていました。

呉羽に集まった書院生達は、かなりの者がよその大学に編入されたりしたんですけれども、よその大学にいて、また愛知大学ができるというので、その大学をやめて愛知大学に帰ってきた人もいました。ですから愛知大学は言わば東亜同文書院の後を継いだ大学だということです。同文書院の先生方、特に中国語の先生

方が愛知大学に来られ、中国研究や中国語教育が愛知大学の中でかなり重点的になったという点もあります。

ちょっと話が短くて終わってしまいそうですが、あとは何か質問を受けて答える形でやっていきたいと思っています。

今泉 それでは今のお話を聞かれてご質問のある方、それからここには同文書院の呉羽分校の方も上海の方もおられますので、ぜひご自身の体験も含めてお話し願いたいと思います。私のほうからも今日資料を皆さんのお手元に用意させていただきました。時間がなくてまだ目を通されてない方もあると思いますので、私から要点だけ説明をさせていただきます。終わりましたらご質問やご意見ということでお願いいたします。

最初の資料①の『呉羽物語』、これは愛知大学で私の先輩である井上さん（旧姓藪田、呉羽から愛大へ来た）が、書院四六期生の専門部の方の出されている文治報に載せたものです。ご出身が富山ですから非常に詳しいことが書かれています。ぜひご覧願いたいと思います。

二番目の池上先生のものにつきましては、先生は昔から非常に控えめと言うか、もつと言っていたいたいたいののに押さえてしまわれますので、ご本人を前に補足というのも変ですけれども、なぜ同文書院の呉羽の中国語講師に臨時講師という形で招聘されたか。先生は同文書院を卒業されてはいませんが、日本の学校であった青島小学校を出てすぐに青島の禮賢中学校（初級中学と高級中学があります）という中国の学校に入り、それから天津の中日学院に行かれます。これは同文会の経営する、中国人を入れる中学校です。それから同文書院へ。つまり同文書院で中国語を習う前から、中学生の数年間中国語で勉強されている。禮賢中

学校当時の思い出は資料④の『大陸に生きて』という冊子（愛知大学で出しています）に詳しく載っているんですが、これは絶版になっていきますので図書館で見てくださいと思います。私はインタビューの聞き手でした。また禮賢中学校に行く前、中国の学校は夏開講で、日本の小学校が終わるのは三月ですから、四〜五か月間、これまた中国人の家庭教師に付いた。その教科書たるや「孟子」なんです。「孟子」の何をされたのかはちよつと分かりませんが、ご存じの通り「孟子」は日本では、明治あたりまではともかく、普通小学校でやるものではありません。それを日本人の小学六年生の子に中国人の先生が中国語で教えるわけですから大変面白いと言いますか興味があります。

禮賢中学校の学習は、これも面白いんですけど試験が文語文なんです。つまり漢文・文語文で出題され文語文で解答する。例えば遠足なんかすると、それについての感想を記せというので、池上少年が、とにかく漢文で作文する。天津の中日学院では逆に口語文だったと言っておられますが、そういう教育を受けられて同文書院に行く。一年ちよつとですけれども、そこで中国語を本格的にと言いましようか、同文書院の華語萃編を学ばれた。そういうことがあつて呉羽分校の中国語講師として採用されたということです。

その呉羽分校につきまして少し史実的なものが資料②③にあります。②のほうは『東亜同文書院大学史』からコピーさせていただきました。「教授陣は次の通りであつた」というところを見ていただきますと、その最後に「予科講師、池上貞一、中国語」とあります。呉羽では主として中国語は坂本一郎先生、同文書院の鈴木先生の次の次におられた方ですけれども、戦後は神戸外国語大学の学部長で、神戸外大の中国語科の基礎は坂本先生が作られました。それから中ほどにあります山口左熊先生（中国語、中国事情）。この方は

愛大で昭和三〇年に中日大辞典の編集が始まった時、鈴木擇郎先生が招聘された方ですが、ご都合で愛大には来られませんでした。それから池上先生。呉羽ではこれらの方々が中国語を教えられました。最近関口さんという、その後愛知大学に來られた呉羽組の方から、呉羽で使っていた『華語萃編』、ガリ版刷りの一枚のペラペラのもので、持つとボロボロとなりそうなんです、これを寄贈していただきました。私は前にここで『華語萃編』について報告させていただきましたけれども、見比べると非常に面白い。この元になったのは昭和一八年、一九年（呉羽は二〇年）の『華語萃編』なんです、これとも違う。そのままガリ版で刷ったものではない。そうしますとこれは私の推測で、池上先生にお聞きしたいんですが、あのガリ版の、呉羽で使った『華語萃編』を、坂本先生と山口先生、池上先生などが手持ちの何年版かの『華語萃編』を元に稿を起こされたものなのか。昭和一八年の『華語萃編』がここにあるんですけれども、それと比べても違う箇所があるわけです。ですからこれは呉羽の坂本先生方が手直しをされたのではないかと。まだはっきりはしていませんので詳しく調べないといけない。私にとっては非常に面白い研究材料がまた増えたということです。

さてこの呉羽分校の経緯につきましては、先ほど池上先生からも概要紹介がりましたが、資料③を見ていただきますと、呉羽分校長齋伯先生（学長代理）のチーム一三名と書いてあります。これは昭和二〇年に日本内地にて入学したものが渡航できない、上海へ行けない、それを集めて呉羽で分校を開くわけです。そのため、の要員として、すでに本間同文書院学長が上海で二〇年の初めに、同文会からの連絡もあったかも分かりませんが分校を開かざるを得ないということから、二四名の教職員を派遣するという決定をします。た

だ、もうその頃、同文書院の教職員の家族を内地へ引き揚げさせるといふ方針も、現地の居留民や軍の意向もあつてか、非国民扱いにされてなかなか帰国の許可が下りない。二四名の要員も本間先生が日本軍の南京総司令部へ行って、これは特別だからと、枠外として了承を得たのですが、それすら全員が日本に派遣できず、結局一三名が派遣されます。それに内地留学でいた神谷先生、内地におられた池上先生等を集めて、この名簿に載っている教職員が分校の教授陣として確定しました。八月一五日に敗戦でいったん廃校になるわけですが、外務大臣に対して東亜同文会からも齋伯分校長からも、これを再開したいという申し出をします。外務大臣がよろしいと言つて、同文書院呉羽分校が再開されるのが一〇月一五日です。その間に教職員は先ほど言つたように一部は帰りますが、一部はここにありますが、教授会（と言つても一三名しかおりませんので実質何名だったか分かりませんが）から齋伯分校長名で、資料③のような文章で上申書が行くわけです。

これが再開要望の五項目ですが、内容を見ますと非常に意味深いものがある。とりわけ二においては、財政措置を要求しております。東亜同文会からちゃんと金を送つてくれと。それから一部退職者には退職金を出すようにということです。三の理事選出というのは、呉羽分校からも東亜同文会の理事を選出させてほしい。肝心の東亜同文会はもう解体寸前ですけれども。私が一番注目する四では、同文書院の存在意義を堂々と述べている。日本帝国主義の先兵とか、スパイ学校（軍探学校）というような誹謗中傷の類は全く当たらないという主張です。下段で具体的な問題について反論しています。帝国主義云々というのはむしろ内地大学にこそ、その鋒を向けるべきではないか。つまり帝国大学（とは書いてありませんが）に対してそういうことを言うべきではないか。同文書院はどういう大学であつたかというのは、外務官僚を見ても分かる。大

使・公使、つまりキャリア組は数えるほどしかない。大部分は現地の中国人と在留邦人とのあいだを円滑にさせるための領事、非常に苦しい地方の現場で働く領事、そういったところで、外務省に入った同文書院の卒業生は黙々として働いていた。それからマスコミ関係は逆に同文書院の卒業生が多く就職していた。そういう役割をしていたのであって、同文書院はむしろ自由主義的の大学と見られていた。日本軍当局から、あるいは上海領事部から、自由主義の温床だと言われて、居留民団からも非国民と言われていた。この事實は支那事変以来、戦争中に同文書院がどういう対応をしたかということ語っている。五では、同文書院は中国を対象とする大学であり、最高学府である。これは今後も持続されるべきである。中国国内では無理だということならば、後継大学として国内に置くべきである。以上は『東亜同文会史・昭和編』からの抜粋ですが、占領下にあつて控えめではありませんけれども、主張を堂々と述べた文章ではないかと思えます。

それから資料⑥に、内地留学中に呉羽分校の教授として、さらに愛知大学の創設にも活躍された神谷龍男先生が『愛大通信』に書かれたものを参考までに載せておきます。

この他、分校長の齋伯先生から東亜同文会本部、あるいは本間同文書院学長に出された報告書の生原稿が大学に残っております。本間先生が鈴木擇郎先生に預けられた資料が段ボール箱に入っていた。図書館の成瀬さんからの連絡で最近になって分かりました。私が見た記憶のあるのも一つ二つあるんですが、これをいずれ公開したいと思います。ここにコピーしたものの以外に、まだ公表されていない貴重なものがあります。

それに関連して霞山会の三万冊を、神谷先生の努力によって愛知大学がその後購入し、今現在霞山文庫として所蔵しております。これに池上先生も行かれています。池上先生はこれについて、自分も行ったと

いうことを一言書いてはある。神谷先生のこの文では、「池上君もおられたということを池上君から聞きました」なんて書いてあります。代弁するわけではないんですけども、その後愛大の事務員をされております大野一石さんも学生として一緒に行っております。そのことがありますので、神谷さんの文章もここに載せておきました。これは（二）がありまして、（二）では愛知大学の創設時、とりわけ豊橋市役所関係者とのやりとり、当事者としての神谷先生の活躍ぶりが描かれております。

以上蛇足であります但補足させていただきました。では池上先生へのご質問を。

**殿岡** ちよつと今のお話に補足させていただきますけれども、ダンボール箱が図書館で見つかったというのは、今大学誌を作っています加藤先生がいろんな書類を探していらして、それで成瀬さんが「こんなのがあるよ」と図書館から出してくださったんです。そこに何でそういう重要なものが入っていたかというのは、研究館の中に父（本間）の部屋がございました。だいぶこちらへ来られない時がありまして使わなかったこともあるんですが、学内の不思議な方から私のところへ葉書がまいります、ここはたぶん父のことをよく知ってくださる方々ばかりですから申し上げますけれども、今でも文面を覚えています。汚らしい字でした。「先生が来ないのに研究室を占領している。研究室が足りなくて困るので片づけてください」。そういう文面でした。それで石井先生がいろいろ父の世話をしてくださって側にいた人ですから、石井さんにそれを見せましたら、「誰にも言うな」と言うんですね。「先生これどういう人が書いたんですか」。それが最近分かったんですけれども、村長先生でした。石井先生に「どうしましょう」と言ったら、「それじゃあ」ということで大慌てで父の荷物を段ボールに入れてどこかに片づけてくださった。それをどこに置いたかおつ

しやらないんです。図書館の中にその段ボールがあったのが、ほんとに最近分かったんです。そうしましたら中に父の研究していたノートや何かも全部入っていました、今大学史を調べなかつたらそういう重要な書類は日の目を見ないですつとどこかにしまわれていたと思いますし、成瀬さんの熱意がなかつたら浮かび上がってこなかつたと思います。ですからいろんな重要なものは父の研究室にあつて、わけあつて石井先生が図書館へ持つていったということなんです。まだまだいろんなものが出てくると思います。

退職金のことなんか載っていますけれども、終戦の年の一年間は東京から上海にお金がないんです。費用が何も無い。ですから父は東京に帰ってきた時に同文会に行つて、一年分のお金はこちらにプールしてあるわけだから、それをせめて、無一文で帰つてらした先生方に退職金であげてくれないかという交渉をしました。野崎先生とか鈴木先生はお古いから五万円ぐらい差し上げられたし、皆様に退職金として分けられたんです。その時に同文会の理事の方が、同文書院がみんなお金を使つちやつたということをおつしやつて、もめたということがあるんですけれども、父からしてみれば一年分の費用は東京にプールしてあるはずだと確信していたものですから。それで先生方には、小使いさんに到るまで計算してちゃんとお金をお渡ししたそうです。

**司会** ありがとうございます。今大変詳しいお話を知つていらっしゃる方がいらつしやつたんですが、どなたかということをご存じでしょうか。ご紹介します。本間先生のお嬢さんです。

**殿岡** ごめんなさい、殿岡晟子でございます。

**司会** 本間先生のお嬢さんですから詳しいんです。また後ほどいろいろご紹介します。次の方どうぞ。ご質

問があつたら。

今泉 呉羽におられた杉山さんとか齋伯さんとか、ぜひそういう関係者の方から、質問でもお話でもお受けしたいです。

司会 ご遠慮なさらずに。センターとしては去年、二五期の、一〇一歳になられる安沢隆雄さんにお話をしていたいただきました。先だつては四四期の杉山好美さんから、同文書院の最後の時代のお話をビデオで収録させていただきました。今日は池上先生から呉羽のお話を聞きました。現在愛知大学には、例えば同文書院の成績証明書のように、物的に継承している資料がいろいろありますが、精神的な面でどういうふうに継承されているかということは、安沢さんのお話、杉山さんのお話、池上先生のお話でだいぶまとまるような気がいたします。本間先生のご長女殿岡晟子さんが今お話をされましたが、本間先生が亡くなられて以降、その資料がどういふふう保存されていたのか、どういふふう拡散してしまつたのか、大変今になって残念なことがいっぱいあるわけです。

一月三日に愛知大学の全国総会がございます。そこで本間喜一コーナーというのを作りますので、今着々とその準備をしております。チームを作つて展示の方法や資料の収集に務めておりますが、今日はこういう機会ですから、本間先生のお嬢さんが持つてきてくださった貴重な資料をちよつとご覧いただいて、本間喜一コーナーはどんなものかと皆さんが思い描いていただければありがたいと思います。これは最高裁判所の事務総長の辞令です。そして国会図書館の館長、それから最高裁のこういふ資料も全部展示します。本間先生がご次男の昌二郎さんと一緒に上海に行った時に、お嬢さんの晟子さんに中国はこんな様子ですよ

と、今で言う絵手紙を書いてくださったものとか、あるいはお父さんの似顔絵とか。

それからもう一つ、これは愛知大学が昭和二五〜二六年頃から、愛知大学の敷地を国から払い下げってもらうために五千万、市町村から寄付をお願いした文書です。これも展示します。その時に愛知大学事件が起きました。そして愛知大学はアカだと呼ばれるようになって、市町村からの寄付金はストップしてしまいました。大変本間先生はご苦労されたと思います。そういう時の資料、そしてその次に今度は愛知大学事件の逮捕状。こういうものを展示します。まあこれは大変和やかな、本間先生の息子さんが小学校一年生の時に描いた本間先生の似顔絵です。それから本間先生が愛大事件について行政管轄委員会の特別委員会に呼ばれてお話をした、愛大事件の内容全てが書いてあります。これも今度展示します。そして本間先生が愛大の自治を守る。学生を守る。学生を自分の三親等以内の家族だと思つて、必死になつて裁判を成功させる。しかし学生は本分を忘れるなど言つて学生をたしなめた。そういう資料も展示します。同時に豊橋市、あるいは文化協会としても、本間先生に感謝状を出して、いかに豊橋が愛知大学によつて軍都から文化の都市に転換したかという感謝の気持ちがいっぱい入つております。これも展示します。

これはちょっと面白い。この印籠は紋所はないですが、本間先生の煙草入れとキセル。それから実印です。履歴書、借り入れの保証書までこれを使ったという、こういうものも展示しまして、愛知大学の宝、豊橋の文化の象徴を表すような本間喜一コーナーを作ります。これらの集積を、本間先生の生い立ちの記、学究時代、上海の東亜同文書院時代、それから最高裁事務総長時代、そして本間先生の人柄を偲ぶ等、コーナーに分けて展示をいたします。それもただ愛知大学の目から見たものだけでなく、豊橋市の美術博物館

館長さん、副館長さん、そして主任学芸員にも協力してもらいまして、立派なものを作りたと思います。そういうことでぜひ一二月の三日を楽しみにしていただきたいと思います。

それではまた続いて質問をお願いします。呉羽時代におられた方はいらっしゃいませんか。杉山さんは呉羽に行かれましたか。杉山さんは豊橋出身、同文書院の四四期の卒業生で、この前もビデオで収録させてもらいました。その時分の上海の様子とか、同文書院の精神とか。

杉山 池上先生、大変よく分かりました。資料②のところに呉羽に行った人の数が載っています。四四回生で三二名行きました、この中に私も入っております。合計二四〇名が最終的に呉羽へ行って、そこでスタートしようということでした。私は兵隊に内地で入隊し、九月に除隊してうちへ帰っていたら、呉羽のほうで継続してやるからそちらへ行きなさいというご案内がありました。そこで布団を一組み作って呉羽へ送りました。行く時はいいんですが、帰りに無くなってしまった。向こうへ行って同級の仲間がちよいちよやってきまして、最初は一〇人ぐらい。二〇人〜三〇人まで確か増えていったと思います。ごろごろしていて、先生達のご苦労の内容は全然分かりませんが、とにかくここはいいところだな、なんてことで、ここで大学生活ができればいいじゃないかということでご我慢していて、食事も充分できていたと思います。一月に行つて、楽しい青春時代が一二月まで続いたわけです。そのあいだ先生方がいろいろご苦労をなさっていたようなことは全然分かりません。とにかく止めになったよという情報だけしかないものですから、なければ帰りましょうということでご荷物を全部また送り返したんですが、特急の汽車の米原辺は大変なところでしてね、荷物が無くなって、うちへ帰つても無いからまた見に行つたんですが、全然分からない。米原の辺まで

は来たらしいんですが。私の衣類は終戦直後のどさくさで全部ペアになってしまった。

それはともかくとして上海から引き揚げて、今度は呉羽から引き揚げて、やっと帰ってきた次第です。勉強していないんですがなぜか情報があつて、先生方のお名前は全部分かつております。大野一石君は後輩で、彼はよくちよこちよこやっていましたね。先生方の動静は、池上先生がいらつしやつたのはよく分かりませんでした。だいたい懐かしい先生の名前ばかりです。授業はあまり出たことなく、とにかく遊ぶのに忙しかった。同級生が来て「よく生きとつたなあ」という話ばかりしていて。そんな思い出があつて、今日初めて内幕が分かつたわけでございます。大変参考になりました。当時学生は授業も一部していましたが、僕等はあまり授業に出られなかつたと思うんですが、どうでしょうか。二か月前後滞在していたんですけれども。自由に参加して授業をやつたのかどうか、その辺も記憶にない。予科専門科主体でやつていて、学部の方はなかつたのかも知れませんね。

**司会** 池上先生どうでしたか、授業のほうは。

**池上** 授業をやつたかなあ。

**殿岡** 私の主人の殿岡も呉羽へ行つたのですが、中国語の勉強はやつたと言つておりましたけれども。それも新入生に教えた。

**杉山** 新入生は真面目にやつていた。大野一石君たちはやつていたんですが、我々は威張つちやつて、遊んでいたのかも分かりません。とにかく先生もスタッフもこれだけ大勢揃つていらつしやるんですからね。一円一億先生、若江先生。若江先生のところに行つたかな。坂本先生も知つてます。道上先生は柔道部の先生

で良い先生だった。その後愛大には？ 来なかったんですか、そうですか。

殿岡 フェンシングを教えていらした。

杉山 私も柔道部にいたものですから懐かしいんです。愛大は柔道着を寄贈しましたね。柔道部は同文書院も強かったですよ。私は一番下のほうにりましたが、道上先生は黒帯でやっておりました。西願寺守君か、彼も大変柔道が強くて。豊橋に来たようですね。

渡辺 職員になりましたよ。

杉山 非常に懐かしい思い出が出てまいりました。感謝申し上げます。以上です。

司会 ありがとうございます。今杉山さんからいろいろ同文書院の呉羽時代のお話を聞かせていただきました。杉山さんは同文書院を卒業して京都大学に行かれた。

杉山 予料だけ。卒業証書はいただきましたが、本当は卒業していない。

司会 京都大学には無試験で合格。そういう形で卒業しまして、中部ガスにずっとお勤めになって、最後は常務取締役監査役で地元で大変貢献しております。もう一つは愛知大学がお金に困って借り入れをする時に、中部ガスの社長の印鑑を杉山さんが持って連帯保証の印を押していた。

杉山 社長の秘書をやっていましたから当然です。

司会 まあそういうふうに、愛知大学と深い関係のある方です。

杉山 一番大きいのは、卒業生を私から毎年採用することに決定しまして、毎年入っております。それが恩返しのもりでございます。

司会 実は昨日おじさんが書院の卒業生という方が見学にいらっしやいました。おじさんから東亜同文書院のいろいろなお話を聞いていたので、懐かしくて見に来たと。「では見られてどんな感じがいたしましたか。おじさまは東亜同文書院のことをどんなふうに話されていましたか」という質問をしたら、「何しろ東亜同文書院の生徒はよくできたそうですね。同文書院を不合格になると東大や京都大学へ行った」と。そうですか。そういう言い伝えがありますか。おじさんからそんな話を。その証明がありますからご覧ください」と言って、今の杉山さんの、同文書院の卒業証書、本間喜一の印を見せてあげました。そうしたら納得しました。「やつぱりおじさんの言ったことは本当か」。その修了証書・卒業証書を持つていけば、当時東京大学も京都大学も無試験でフリーパス。「ウエルカム」と言われたそうです。それを喜んで見てお帰りになりました。また「在所は九州だから、来年あちらのほうでセンターが講演会をやる」と聞いたたら、親族一同を集めようと思います」。だから愛知大学の大学史は大変貴重な存在であるということになるかと思えます。

池上 はい、いいです。

司会 今日のご心配要りませんね。愛知大学OBの田中さんがお迎えに行つて、帰りもちゃんとお送りしてください。だから私達は安心して最後まで先生のお話を聞くことができます。田中さんありがとうございます。ではゆつくりと、和氣藹々のうちに話題を進めましょう。はいどうぞ。

渡辺 私は同文書院とは関係がないわけですが、愛知大学オープンニングの昭和二二年の一月、愛知大学に来た限りは中国語を徹底的にやり直そうと思つて、ひよっこり教室へ行つたのが、実は池上先生の教室でした。

ところが私が内地で習った中国語は有気音・無気音の区別が完全に言えません。四声という中国語の抑揚も全然なっていない。それからいわゆる白話―現代文と言いますか、漢文をやっていますから読むほうは普通に行けるんですが、ヒアリングが全然耳に入っていない。しかし上海から、呉羽から集まった同文書院関係の人がみんなペラペラなんです。内地で三年やってきた連中なんか全然ついていけない。どうやってそんな訓練をされたのか。学徒動員、食糧難と学校の存在も危うい中で、どうして中国語がこんなにまで根付いたのか。

中国語がだめだからというので私はロシア語に行きました。初めのうちは岡部先生という先生に付き、特殊なロシア語のABCから始めて勉強していたんですが、ハルピン学院の生徒が復員して帰ってきて、今度は全部ロシア語で授業が始まり、内地組は全然お手上げで、だめになってしまいました。仕方がないからドイツ語のカンニングをして逃げて学校を卒業したような有様でした。どうしてあんな混乱の中で有気音・無気音・ヒアリングをあれだけ訓練されたのか、僕はちよつと不思議に思うんですが、池上先生ご苦心談があれば一つ聞かせていただきたいと思います。

池上 誰か他の方答えていただけませんかでしょうか。

今泉 池上先生は中国人に習っているからちよつとその辺のことは……。同文書院ではどうだったんでしょうか。愛知大学でも教えられるわけですけども。

渡辺 いわゆる「上海にカラスが鳴く。アア、アア……」というやつですか、実際に富山でもあれをやられたのかどうか。それから私が入学した時に各寮で、いつも「アア、アア……」やっていました。

殿岡 富山でもやっていたそうです。

杉山 先輩が後輩に教える。これは書院から受け継いでやっています。

渡辺 では愛知大学がオープンした時に朝便所へ行くと、ウンチでウンウンうなっているような声が聞こえて便所が全部占領されていましたが、あれもやっぱり同文書院の流れですか。愛知大学が一番最初にオープンした時に、全寮制を復活するかどうかということで第一回の学生大会がもめにもめたことがあります。実際は「アア、アア……」を復元しようと思っていたグループがあったということです。とても内地組にはついていけなかった。一番初めに池上先生の教室へ行つてあきらめてしまいました。まあそれは怠け者の学生の標本である私の体験談ですけれども。

今泉 池上先生のように中国人の発音が耳から入って学ぶというのは、我々普通の日本人にはちよつと無いですからね。先生が書かれています。「内地から同文書院へ行つて、初めて入った一年生のクラスでこんなに差があるので」ばかばかしくて、とは書いてないんですけれども、非常に真面目にと言うか、「そういうふうにする必要が無かった」と。「一年生が終わったら病気になるって帰ってしまったから、自分は同文書院の正規の教育についてあまり言えないんだ」と書いておられます。だけどぜひおっしゃってください。

池上 私は中国の青島というところに小さい時からおりました。外務省のほうで満州や青島などの日本の小学校を出たばかりの連中若干名を中国の学校に入れる制度ができて、校長の推薦なんかがあって、どうかと言うんです。私は総理大臣が一番偉いと思つていたものですから親父に「中国の学校に入つて総理大臣になれるか」と聞いたら「なれる」と言うもんですから、それなら行つてみようかと思つて。天津に東亜同文会の作つている中日学院という、中国人の入る中学・高校があり、一人はそこに行きました。私はちよつ

と体が弱そうに見えたので青島に行けと言われ、青島で中国の学校に入りました。ただ行けと言うだけで、お金は出してくれましたけれども何も世話はしてくれなかった。

一種の外務省の留学生のようなもので、いくらかプライドみたいなものを持っていましたが、中国語がうまくなろうという考えは全然ありませんでした。それでも毎日通っているわけですから少しは聞いたりしますが、やっぱり中国語をやる場合は小学校を出た後ぐらいいからきちっと習わないと、帰れば日本人の社会の中にいるものですから、中国の学校へ行つたからと言ってそれだけではうまくならないわけですね。私は実は中国の学校に行っておりながら自分の中国語は本物ではなかったと思っております。むしろ定年後七〇歳くらいになってからもう一回自分で勉強してみて、ちょっと自信ができましたけれども。それまではまあ頻繁に使う言葉はしょっちゅう聞いているからいいんですけども、少し複雑な言葉なんかは特に覚えようとも思わなかったし、せっかく中国の学校に行っておりながら実はだめだったと言っていいと思います。語学というのはそういうものかというふうに、あとで自分で感じたわけです。

司会 他にございませんか。藤田先生お願いします。

藤田 呉羽時代の教室は、工場の中のここでやっていたというのを現地へ行き聞いたことがあります。今は東京の音楽大学の練習室なんかになっている。でも建物は昔のままでした。当時はそういう工場の中に、書院用に教室をいくつか区切ったりしたんでしょうか。どんな様子だったんですか。

池上 あまりはつきり授業のことは覚えてないんですけどね。

藤田 ものすごく広いところでやったんですか、あるいは狭いところでやったんですか。

池上 期間が短かったせいもありますけれども、記憶がないですね。

ただ食堂に行つて、皿に盛つてあるのを教員も学生も取つて食べるわけですけれども、我々もやつぱり、なるべく大きいのを、たくさんあるのを見ながら取つた。そんなことを覚えていきます。

藤田 やつぱり食べることが一番重要だったと。

池上 伊藤忠兵衛さんと二回ぐらい一緒にご飯なんかを食べさせていただけまして。

藤田 チラシのこの写真は私が行った時に撮つたものです。今とはちよつと雰囲気が違うのかも知れませんが。

池上 いや、こんな感じですよ。

藤田 今は工場の広いのがよいと言つて音楽の練習場になっているそうです。歌を歌つたりピアノを弾いたり。屋根がギザギザになっているのが音響にいいんだそうです。あと東京の東亜同文会へ本を運びにいった方は何人ぐらいおられたんですか。

池上 二、三人です。初めはそこから出して牧田先生の家へ運んだんです。その本はあとで愛知大学へ。

藤田 当時東亜同文会にあったそういう図書関係はその時全部出され



呉羽校舎

たわけですか。残っているのはなかったんですね。

池上 たぶんなかったと思います。

藤田 資料を見ますと、神谷先生の書かれた文章の中には東亜同文会の前にあった満鉄の東京支社の分はそのままだったと書いてありますから、これはみんなアメリカへ行っちゃったんですね。

池上 それは知りませんけれども。小岩井先生が来られて愛大の責任者になったんですが、神谷さんがものすごく張り切っていて嘯みつく。本間先生はすぐ最高裁のほうへ行っちゃったんですが、小岩井先生が何とかしてくれと。神谷さんは本間先生に言われて東京のほうへ行き、あとで国学院の先生をなさった。小岩井先生が亡くなされた直後に本間先生が神谷さんに、また愛大（の客員）に来いと言ったんですけど、その後、すぐ神谷先生が亡くなってしまいました。本間先生としては無理に神谷さんを愛大から追い出すような形で向こうへ連れていった手前があるものですから、小岩井先生が亡くなってこちらへまた呼び戻したつもりだったんですね。

藤田 もう一つだけお聞きしたいのは、結局愛知大学が豊橋に決まることに関しては、やっぱり今お話の出した神谷先生のお力が相当大きかったんですね。

池上 と思いますね。

殿岡 神谷先生が見つけてらしたんですね、ここが空いてるよと。神谷先生のお宅は高浜ですから、ご実家に帰る時にここを通りますし。それで名古屋の財務局に行ったら、今名大からも申し込みがあるので早く先に申し込めと言って。便箋も何もないのにどうするんだと言いましたら、係の方が紙をくださって、そこへ

父がパーッと書いて出したんです。そのあとに名大で、ほんとに一足違いなんですって。ここは進駐軍が入っていたらしいです。それが出ていっちゃったあとで、その受付をやった財務局の係の方が一橋で父の教え人だった。ですから「先生早く、早く」と。ほんとにタイミンクですよ、皆様の協力と。

**今泉** さつきちよつと名前が出た大野一石さんが呉羽組で愛大の事務長をやっておられた。愛知県人会で神谷先生が高浜の方で、大野さんが豊橋。そういう点で大野さんのほうから言えば親しみを感じておられた。

それで呉羽が解散になって豊橋へ帰ってくる。池上先生は清算をするというのでまだ浅野庶務課長と呉羽におられたんですね。大野さんは帰ってこられてからも高浜におられた神谷先生のところ顔を出されていって、同文書院を日本で続ける場合は豊橋のここが空いているという話を持っていかれた、ということを神谷さんが書かれています。神谷さんのほうとすると大野さんとはあまり学生としては親しみがなかったらしい節もありますね。他の学生のほうがむしろ親しい関係にあった。けれどもやはり豊橋のこの校舎に決まったのは、神谷先生のところの情報を持っていった大野さんの功績が大きいと思います。

**藤田** さつきの続きで豊橋に決まる前、呉羽の齋伯先生と本間学長との手紙のやりとりの中で、最初の頃の文面を見ていると、日本へ帰ってからまだ愛知大学という名前ではなく東亜同文書院大学にしようということだったんですけど、大分県の別府あたりも候補地と書かれていたんです。

**殿岡** そうそう、卒業生がいたんです。それでこっちへおいでと言われて、あっちもこっちも見たいんです。でもあちらにすると東京とか名古屋辺の良い大学の先生を講師として使えないわけです。だからやはりこの辺のほうが、私学は文系が無いし、碁の石を置くのと一緒に、先生の良いのがないと大学は生徒が集まら

ない。坂本先生も大分ですからね。

今泉 これは『東亜同文書院大学史』でも触れていて、他にも本間先生が書かれています。新しい大学を作ろうと一五人が最終的に東京・神田の何とかという旅館に集まった。永倉さんという別府出身の方がいて、大分・別府が有力な候補として出たんです。別府市長が上京する時、同文会事務所に立ち寄って売り込まれたこともあります。ただそれと並行して、先ほど言ったように二二年になりますと大野さんが高浜の神谷さんのところに情報を持ってきます。五月に東京では新しい大学を作るといいう話が進行するわけですけども、神谷さんのほうはそれとは無関係に、と言うか本間先生が帰ってこられるのは春ですからそれ以前に、神谷さんはお父さんの関係もあって愛知県下に有力なコネを持ち、どこがいいかとアンテナを張りめぐらされていた。とりわけ豊橋との関係では大野一石さんも有力な情報を持っておられたので、神谷先生が書いておられますけれども、経済的だけではなく政治的にもコネをフルに活用されて、この豊橋を大分・別府よりも先に具体的に、例えば豊橋市長と会ったり踏み込んで交渉されている。

私を知りたいのは、本間先生が四月に帰って報告書を出されるというのは『同文書院大学史』にもあり、原本も豊橋の先ほど言いました成瀬さんの方にあるんですが、神谷さんがどの段階で本間学長とコンタクトを取られたのか、それが明らかではないんです。設立趣意書とかそういう最終的な段階になる前に豊橋が決定するというのは、絶対に神谷先生の努力があつたからだということ、客観的な資料もあつて述べられるんですが、本間先生との間のコンタクトがいつ取られたのか。

殿岡 殿岡が学生のくせに神谷先生と父とのあいだをすごく行き来したんです。父は本当にかわいがつてま

したよ、私と結婚するまでは。結婚してからはあまり良く言わなくなつたんですけど。もううちに入り浸りでしたもの。大学を作る時も、何で一介の学生があんなに動くかと思うくらい。ですから学校を作る時は先生方も一生懸命でしたけど学生さん達もみんな一生懸命やつたと思います。

**今泉** これは貴重な情報です。ありがとうございました。そろそろ時間だものですから、一つだけ申し上げておきますと、同文書院呉羽分校というのは、名前は分校ですが非常に重要な位置を占めています。その実態は外務省が許可して呉羽で七月二十五日に正式に開校され、講義が始まります。一つの資料によれば学生一七七名、教員一三名です。八月一日に終戦です。一六日に休校措置です。これで約三〇日間です。学生は帰省させるということで、教職員は若干遅れたという説明がさつき池上先生からありました。一部の者には退職金か何かそういうものが出た。それでも一回東亜同文会宛に学校存続再開の要望書が出される。それが許可され、外務大臣が了承したのが一〇月二五日です。そこでまた学生は集まります。八月二五日以降日本国内に帰国した者や、杉山さんのように内地除隊した同文書院の学生がそこに入るわけです。つまり新生と学部生と言いましようか、上級生も構成員になります。一〇月二五日に授業が再開されたと思うと、一月二五日にはもう授業打ち切りです。三〇日間です。つまり夏休み前、敗戦前に三〇日間、敗戦後に三〇日間という学校だったんですね。ですからその中でどういう授業が行なわれたか、若干の記録はありますけれども、先ほどの杉山さんのお話にもあるように明確な記録は明らかでない。それから池上先生の、よく覚えてないというの、当時の状況下ではこれまた実によく分かる。八月二五日という混乱した状況の前三日、後三日ですから。こんなことを言うこともないんですけれども、五〇年後の今、我々がああだこうだ

公開講演会のお知らせ

# 東亜同文書院大学呉羽分校顛末 —海を渡れなかった書院生たち—



講師 池上貞一（愛知大学名誉教授）

日時 2007年9月29日(土) 13:30～15:30

会場 愛知大学豊橋校舎 本館5階 第2会議室  
※豊橋駅前名画街「愛知大学豊橋」下車すぐ

◎入場無料 申込みは自由ですが参加下さい。

事前申込不要

お問い合わせ先  
愛知大学東亜同文書院大学記念センター・オプショナル・リサーチセンター  
〒411-8522 愛知県豊橋市豊橋3-1-1 TEL:0532-47-4112 FAX:0532-47-4100

と言っているのも実はよく分からない。そういうものですね。

今まとめのようなことを申し上げましたけれども、実は当初、今日の資料①にあります井上さんの文章を拝見しまして、これは面白いということで、呉羽のことについてご報告を願いたいと一昨年来お願いしてきました。その後どうも体の調子も悪いということで、お蔵にしておりました。その後先ほどの越知さんのお話で、藤田さんのほうからぜひ池上先生に呉羽のことについてお話を、という提案がありまして、私もそれに賛成したんですが、一〇数年前に池上先生が発表されたものでかなり詳しいものがあつたりしたので、ちよつと池上先生に申し訳ないなと思いつながら、敢えてこの演題で今日お話を伺いました。池上先生には休

養中のところ、無理に出てきていたでいてこう  
いうお話を伺い、申し訳ありません。心からお  
礼を申し上げます。今日は池上ゼミの人達も多  
数おりますので、個人的にお話をしたい人もお  
りますので、よろしくお願ひします。本日はま  
ことにありがとうございます。

司会 ありがとうございます。では本日の講  
演会はこちらをもって終了させていただきます。  
誠にありがとうございます。

## 資料①

### 呉羽物語

四六期予科 井上方弘(旧姓敷田)

一九四五年(昭和二〇年)、四月同文書院最後の入学生・四六期(予科・専門部)は、上海組(上海中学・上海商業・北京中学・満鉄派遣等中国で上海の本校に入学した者)を除き、同期生のほとんどが渡航出来なかつた呉羽組に分かれる結果となつた。昭和二〇年四月と云えば、上海周辺に対する米軍機の爆撃が激化し、もう東シナ海は制空権・制海権共に米軍に抑えられて、上海―長崎間の航路は米軍の潜水艦等によつて極めて危険な状態であつた。

### 分校がなぜ呉羽の地に?

先ず東亜同文書院大学呉羽分校が北陸の地富山県婦負郡呉羽村小竹(現在富山市呉羽町)にどうして誕生したのであるのか。

呉羽分校は旧呉羽紡績(当時呉羽航空機(株))の寮・工場の一部を借りて開校された。

伊藤忠兵衛社長の大建産業(株)(三興・呉羽紡績・大同貿易が合併して作った大企業であり、その当時の三興は丸紅・岸本商店・伊藤忠の三商社合併によるもの)グループの一つであつた。呉羽航空機(株)は、昭和二〇年当時書院生(七期)の大先輩功刀寅次氏が副社長であつた。三興、丸紅、大同貿易、伊藤忠の上層部に書院生が多く、この様な人脈によつて呉羽分校が開校されたと思う。

### ようやく開校

渡航待機中から漸く昭和二〇年七月二十五日に至り、齋伯守分校長(学長代理)ほか教職員(一三名)と希望に満ち溢れた内地入学生(予科・専門部)一七七名によつて呉羽分校が開校された。

当時戦時下の事でもあり、大阪方面から無蓋車に乗つて来た者も居り(小生もその中の一人、水見線から高岡駅で北陸線に乘換え、大門・小杉・呉羽と三つ目)呉羽駅で下車、プラットホームの陸橋を渡つて駅前に出ると広場左手に木が一本(先日六月下旬に行つて見ると大木になつていた)ポツンとあり、右手に目通の大きな看板が印象的に目に入った。駅から徒歩五分位の所に正門があり(元呉羽紡績の膨大な敷地は現在富山市民芸術創造センターと、桐朋学院大学・桐朋オーケストラ・アカデミーと、富山県立呉羽高等学校の三つに区分されている)右手の三階建事務所や、その他工場も一九二〇年代ヨーロッパで流行したと云われる直線を基調としたアールデコ様式のものであつた。それに引換え寮は大きい割に、元紡績工場的女子寮だつたせいか木造二階建の稍々お粗末な感があつた。一階は専門部生、二階は予科生が入り、小生の部屋は二階中央に位置し、晝敷(何世間だつたか覚えていない)の部屋に七名だつた。

寮生活は戦時中学徒動員体制下でもあり、呉羽航空機工場で約四時間の作業、授業は約三時間と云う具合だつた。工場の別棟へは女子挺身隊の女学生も動員されて来ていた。庭は広々と

して前に藤棚（現在も富山市民芸術創造センター横に一部残っている）があり、小さな池を挟んで八角亭（現在建直しされ立派なものになっている）があり、友達同士がよくここで語らい（談論風発）をしていた。

寮食堂は幅広い階段を降りて左手方向に、渡り廊下を工場の方へ数十メートル行つた所の大きな鉄筋の吹貫風建物だった。入つて右手奥に大きな鉄釜が三台据え付けられていた。云うまでもなく食糧事情は極めて悪く、サツマイモを刻んで混ぜた御飯は未だましの方で、サツマイモの葉、大豆入りの雑炊等がアルミの食器に盛られて左側の大きな食台にずらりと並べられ、一緒に並んだ教職員の方も少しでも多く入つた盛りの良いものをと手を伸されていた姿は、今でも目に浮かぶ。

近所の農家へ出かけ甘藷を分けて頂く者も少なからずいたが、親分肌の菅井和夫君（千葉県小見川村）のように度々故郷に帰り食料を運んできて呉れた人もいた。菅井君とは工藤先輩（詳細後述）から紹介状を頂いて会つたので、すごい同期生がいるものだと感じ、尊敬の念を持った。

### 富山大空襲と救援活動

昭和二〇年八月一日夜、B 29 一七四機（サイパン島・イスレー飛行場配備の米軍第七三航空団所属 B 29 一九〇機中）が富山を襲い、爆弾・焼夷弾を雨霰の如く投下し一夜にして富山市街地の九九・五％を焼きつくした。翌二日学生救援隊を組織し、呉羽山を越えて連隊橋（現富山大橋）を渡り、市街地での救援に向う。神通川の河原には焼け焦げた死体が累々と重なる

り、何の気力もなく只呆然と佇む人も見られた。赤く焼け爛れた赤ちゃんを背負い泣き乍ら歩き回っている若い母親、溝に逆さに填まって死んでいる人、それは地獄絵としか云い様がない。屍体処理、焼跡整理、そして食糧配給（塩のみの三角おにぎり一人二ヶ宛）の救援活動を行つた。市内は焼け野原と化し、その中に大和百貨店と北電本社の電気ビルだけがポツンと建つていた。

死者 二、七〇五人

（この中に、小生家内の実兄が含まれる）

負傷者 七、九〇〇人

罹災者 一〇九、五九二人

罹災所帯数 二四、九一四戸

### 先輩との出会い

小生の呉羽物語にどうしても欠くことの出来ない人物、それは四四期工藤昌伸先輩との出会いである。渡航不能で待機中、水見駅（富山県水見郡水見町＝現在水見市）へ出かけると、突然「君、書院生かね」と声をかけられた。それは、小生が被つていた登山帽に手製の「**書院**」と書いたバッジを見られたからだ。工藤先輩はご母堂様（工藤光園、小原流家元に継ぐナンバー2の方）と二人で水見郡藪田村にありご親戚へ東京から疎開して来ているとの事であった。偶然とは云え、先輩の疎開先ご親戚の家は、小生中学生時代の軍事教練指導教官小澤少尉のお宅であった。（当時の配属将校小笠原大尉とは異なり、穏健な紳士であった）。

工藤先輩のご好意で、毎日の様に疎開先である小澤宅へ訪問し、中国語の発音・声調（四声）を書院カラス方式（先輩と一対一の指導）で特訓を受けた。発音の記号は、勿論現在の拼音ではなく注音符号である。特訓を受ける場所は小澤家のすぐ裏庭の富山湾有磯海に突き出た小さな防波堤の上であつた。這是甚麼？（これは何ですか？）這是柿子。這是白薯。等々簡単な会話もご指導頂いた。特訓は厳しいの一言に尽きるが、一生忘れ得ない思い出であり、感謝の念で一杯である。

先輩から中国語だけでなく、倉田百三著の『出家とその弟子』や、夏目漱石、長谷川如是閑、西田幾多郎、三木清等の文学書や哲学書の読書の推選を受け、氷見町立図書館へ出かけ何冊か読んだ。

### 授業再開

終戦と同時に全員帰郷・待機していたが、一〇月一五日に授業が再開された。神谷龍男先生の国際法、齋伯守先生の漢文、等の授業が頭に残っているが、大半が中国語の授業だった様だ。中国語の授業は池上貞一先生（後に愛知大学教授）と坂本一郎先生（後に神戸外国語大学教授）で担当されていた。

坂本先生の授業の時、最前列の先生の目の前の座席に陣取つた。先生はある日、突然紙袋からサツマイモを取り出し、這是甚麼？（現在は簡体字で这是什么？）と質問された。発音・声調を中心に習つて来ているから、いきなりの会話質問は全員に分る筈はなかつた。然し小生にとっては、工藤先輩に特訓を受けた際に習つた数少ない会話の一つであつた。手を挙げ、立

上つて「這是白薯せぞハウ、ワ、メ」と答えた。坂本先生からご褒美に貴重な白薯（サツマイモ）を頂いた。授業の合間に「何日君再来」のご指導も受けた。

この事があつてから、部屋では同僚（特に年上の静岡県人広瀬君等）が机と椅子を引張り出して無理矢理座らせられ、発音練習に先輩扱いされた。中学四年卒業で而も早生まれの小生は同期生が皆先輩面に見えたが、広瀬君、丸山君、成瀬君、中谷君、佐藤君、戸郷君の諸君が机の前の畳の上に座り込み、書院カラスの真似事をした事が昨日の様に思い出される。

同室だつた丸山武彦君からは、翌年（二十一年）一月に、長野のインドリノゴ（特大）の木箱（四貫目入り）が送られてきて、家族一同（特に病氣療養中の叔母が涙を流さんばかりに）感謝して食した。お礼に氷見の特産イワシの味噌干し等を送り友情を暖めた。

### 寮大会のこと

一〇月下旬だつたか（はつきり日時の記憶はないが）夜寮大会が開催された。寮大会の目的は何だつたのか明確ではないが、懇親会の意味もあつて各県から代表で一人づつ、歌でも話でも良いからやれとの事、富山県代表で指名され田舎の民謡を歌つたのを覚えている。その夜は外地からの引揚げ、又は復員した先輩方（地元新湊出身四三期の明昌保先輩も出席）も多数出席されていた。未だ廃校は決定していなかつたが、書院の将来についての不安があり、存続についての話も論ぜられた。

終戦後の混沌とした状況下で、同文書院の経営母体である東

華同文会は連合国側から厳しい批判の目にさらされ、先行き不透明で経済的困窮と食糧事情の悪化、加えて北陸の地での冬越しに備えての燃料不足等々難問題が山積で、結局一月一日で授業打ち切りとなった。存続への情熱は学生以上に齋伯守分校長はじめ教職員の方々が東奔西走された事を後日知る事となった。

### 呉羽四六期大会のこと

一九九一年（平成三年）六月一日、四六年振りに呉羽分校のあった呉羽の地にて四六期の総会（小生幹事役）を開いた。出席者は別紙名簿の通り、四六期三一名と、滬友会本部副会長大串先輩（三二期）等特別参加者九名計四〇名で懐かしく楽しい一時を送った。富山駅の日通富山支店前で呉羽ハイッ専用送迎バスに乗り込み、先ず分校のあった東洋紡呉羽工場（この当時は呉羽紡績から東洋紡績に変更されていた）へ出かけ（当日は会社休日にも拘らず事前折衝で特別開門して頂いた）昔のままの正門と右手の三階建事務所、寮から食堂・工場へ行く渡り廊下前の藤棚を眺め、又前庭の八角亭もそのままにあり、廊下の扉を開け食堂の鉄筋吹貫風の建物もその奥の大きな鉄鍋もそのままになっており、呉羽組の連中は皆懐しそうにその前に立って四六年前の頃を思い出していた。木造の寮は取り壊されていたが、礎石がはっきりと分り、それを踏みしめ、寮から眺めた大木がいまだにすくすくと伸びていて四六年前の我々青年を迎えてくれている様で嬉しく思った。翌一六日は大串先輩夫妻はじめ宇奈月からトロッコ電車で黒部峡谷に出かけた。参加

者からこの企画も大変喜ばれた。特に四五期の殿岡先輩が翌年他界されたので、殿岡令夫人にとつて最後の思い出の旅行になったと、その後何度もお礼をいわれた。

### 寮歌祭のことなど

小生の呉羽物語の続きとして、寮歌祭に触れておきたい。呉羽での生活は僅か数ヶ月に過ぎないが、小生にとつて書院生（滬友会会員）としての絆を深く感じ、全国寮歌祭（日本武道館、日比谷公会堂）や、神戸寮歌祭、仙台寮歌祭にも参加させて頂き、萩原七郎（三四期）先輩、上海から来られた王宏（四四期）先輩、菅野俊作（四一期）先輩等数多くの諸先輩方との交流を通じ、青春の情熱を燃やして、暴虎馮河の勇を顧みずに一途信念に向つて突き進んだ先輩達の書院魂を回顧するは、感無量であり、忘れ得ぬ宝でもある。

尚、二〇〇二年（平成一四年）一〇月二五日、四四会全国大会が小生の生まれ故郷氷見の「国民年金保養センターひみ」で開催された時、楠瀬勝先輩（富山大学名誉教授）から手伝いを依頼され、全国から参加された五二名の先輩方と懇親会や翌日の高岡国宝瑞龍寺、五箇山・白川郷の世界遺産の見学を通じて交流が出来、改めて書院の絆の深さを噛み締めた。この時芥川賞作家の大城立裕先輩と元毎日新聞論説委員江頭数馬先輩から夫々の自作書を贈られ本当に感動した事を追記しておく。

最後に、すでに鬼籍に入られた諸先生、先輩方、同期生の方々のご冥福を心よりお祈りすると共に、中国との草の根交流に微力を尽くしたい所存である。

同期（四六期滬友会幹事）の嶋田純一君から「実は福原先輩（四五期）から戦後六〇年に当り呉羽分校のことを掲載したのでと、記事を依頼されたが、俺は上海組で呉羽の事は余り知らないし、君は富山の地元でもあり、四六期の全国総会を呉羽の地で世話してもらった経緯もあり、呉羽組として何か書いてもらいたい、頼む」と電話があつた。福原先輩の名前を耳にして、小生東京勤務の折、書院生の溜まり場だった銀座の『つまみ御料』で時々杯を酌み交わした事もあり、帰宅の際も横浜まで一緒に京浜急行で帰ったことを思い出し、拙文も省みず『呉羽物語』をお引き受けした次第である。

〔文治報第二三号（平成一七年一二月）より〕

## 附記(10) 呉羽分校開廢の経緯

呉羽分校は、富山県婦負郡呉羽村小竹所在の呉羽航空機株式会社(旧呉羽紡績)の工場と宿舍を借用して開校することとなり、当時内地留学中であった神谷龍男(二十九期)、石川正一教授が開設備に当たったが、その整備をまち、昭和二〇年七月、上海から分校長齋伯守教授ほか一三名が着任し、新入学生一七七名を收容して開校した。授業は、学徒動員体制下にあつたから、午前・午後の二班に分け、学科授業三時間、工場勤務四時間の割合で行つたが、中国語の学習は毎週十時間の課程を守つた。

八月一日、呉羽とは神通川を挟んで隣接する富山市が空襲により潰滅、呉羽工場にも爆弾数個が落下したが、幸い教職員・学生に被害はなかつた。翌二日、学生救援隊を組織して富山市へ出動、屍体処理、焼跡整理、罹災者への食糧配給等に従事し、市民から感謝されたが、一五日終戦、このため一六日から休校してとりあえず帰郷待機する方針をとり、一九日までに学生全員が帰郷、二〇日には教職員も呉羽を後にした。

【分校の再開】 敗戦により母校の存続は不明となつたが、齋伯分校長は呉羽分校の再開を強く期待し、同文会津田理事長に対して母校の内地移転存続の必要性を訴えた。九月二〇日、同文会は呉羽分校を一〇月一五日より再開方、主務官庁外務省(外相吉田茂)に次の通り申請し、認可を受けた。

## 東亜同文書院大学及北京經濟専門学校内地開講の件

本会經營東亜同文書院大学及北京經濟専門学校ハ、本年新ニ募集セル未渡航ノ新入学生約一八〇名ヲ主トシ、之レニ内地滞留者並ビニ内地ニ於テ復員セルモノ等一二〇名ヲ加ヘ總計約三〇〇名、至急各所属学校ニ復帰セシムベキ管ニ有之候ヘ共、現状ノ下ニアリテハ到底実現困難ナリ。サレバトテ此レ等ノ学徒ヲ無為ニ過サシムルコトハ好マシカラザルニ付キ、先ニ勤勞動員ノタメ出動セル富山県婦負郡呉羽村所在ノ呉羽航空機株式会社ノ工場ヲ借り受ケ之ヲ收容シ、幸ヒ教員ノ内地ニアルモノ二十余名ヲ以テ不取敢來ル十月十五日ヨリ開講致度候間、御認可相成度此ノ段奉申請候。

一〇月・五日、この日は裏日本には珍らしい好天気で、地元官民の参列を得て開校式を挙行した。当日までの復帰学生数は五五名、翌一六日には一二〇名に増加したが、この中には復員した先輩学生の姿も見られ、二〇日には一五八名に達した。教授陣は次の通りであつた。

| 学部 | 教授 | 齋伯守  | 学長代理兼予科長代理 | 倫理           |
|----|----|------|------------|--------------|
| 同  | 同  | 坂本一郎 | 専門部長代理     | 中国語(時局講座)    |
| 同  | 同  | 太田英一 | 教務課長       | 經濟原論、英語、時局講座 |

|                |      |         |          |
|----------------|------|---------|----------|
| 学部助教兼<br>専門部教授 | 広江貞助 | 幹事      | 経済原論     |
| 同              | 土屋芳雄 | 教務課     |          |
| 同              | 石川正一 | 会計主任    | 経済政策、英語  |
| 同              | 一円一億 | 専門部教務主任 | 法学通論、政治  |
| 同              | 神谷龍男 | 研究部長代理  | 国際法、特別講義 |
| 同              | 大木隆造 | 学生・生徒主事 |          |
| 同              | 山口左熊 | 同       | 中国語、中国事情 |
| 予科教授           | 若江得行 | 予科教務主任  | 英語、英会話   |
| 同              | 桜川影雄 | 学生課長    | 哲学       |
| 同              | 五味一  | 教務課     |          |
| 同              | 小橋嘉平 | 学生課事務主任 |          |
| 同              | 道上伯  | 学生・生徒主事 |          |
| 予科講師           | 池上貞一 |         | 中国語      |

【分校の閉鎖】 しかしながら、分校経営の前途は、母体である同文会の先行きについての見通しは立たず、外務省の指導方針も不明であって、経営財源の確保は見込みのないことが明らかとなり、絶望視されるに至った。教授会は、現地における食糧事情や冬季の燃料不足から生ずる経営難をも勘案し、ついに十一月五日をもって授業の打ち切りを決議、その旨を学生に傳達した。この時点の在学生数は二四〇名で、その内訳は次の通りであった。

| 期別 | 学部        | 予科        | 専門部 | 合計  |
|----|-----------|-----------|-----|-----|
| 42 | 三回生<br>六  |           |     | 六   |
| 43 | 四回生<br>一四 |           |     | 一四  |
| 44 | 五回生<br>三二 |           |     | 三二  |
| 45 |           | 六回生<br>一〇 |     | 一四  |
| 46 |           | 七回生<br>九六 |     | 一六四 |
| 総計 | 五二        | 〇六        | 八二  | 二四〇 |

学生の帰郷は十一月二〇日にはおおむね完了したので、同日開催の教授会において、今後の問題につき種々協議が行われたが、結局は見通しが立たず、ただ、方的な期待感に終始する中で、内地における書院大学復活の候補地として、福岡県糸島郡小富士村にある海軍航空隊跡の払い下げ、あるいは貸与が真剣に討議された。

二月六日、占領軍総司令部（GHQ）より大規模な戦犯容疑者の指名と逮捕令が出された。その中に同文会長近衛文麿公の名も含まれていたため、斎伯分校長はただちに上京したところ、外務省当局より同文会並びに同文書院大学の存廃に関し重大な内示を受け、また、同文会からは呉羽分校の閉鎖につき最終的な通告を受けた。よって、全学生に対し、一本学の閉鎖はまだ正式な決定発表なきも、廃校は確定せる運命なれば、各自必ず転入学の措置を採られたし。なお東亜同文会の本部たりし霞山会館は進駐軍に接収され、二月一五日より神田の日華

学会に移転」した旨を通告した。

一二月二五日、齋伯分校長は、校舎の所有者大建産業の伊藤忠兵衛社長あてに呉羽分校閉鎖の経緯と会社の厚情に対する深甚な謝辞を述べた挨拶状を送付、その後の残務整理は池上講師（四〇期）、および浅野庶務主任が担当したが、昭和二十二年二月一〇日、すべての清算事務を終え、一時は書院存続希望の種でもあった呉羽分校は遂に解消した。

【霞山文庫の図書確保】 これより先に、分校の閉鎖が決定した一二月、同文会所有の霞山会館が進駐軍に接収される情報が伝わり、教授会は同会館霞山文庫所蔵の約四万冊の貴重な文献を確保するため、神谷教授、浅野研究員両名を急遽上京させ、同文会牧田武常務理事諒解の下に、同会職員村上計二郎・佐藤義雄ほか数名の献身的協力を得て図書全部を成城学園の牧田常務理事宅に搬入した。この措置により、霞山会館は一二月一五日進駐軍に接収されたが、霞山文庫の図書は無事難を逃れ、後日愛知大学に移譲買収されて同大学設立に大きな役割を果たした。

〔東亜同文書院大学史〕より〕

## 東亜同文書院大学要望覚書五項目ノ件

昭和二〇年一月二十九日

東亜同文書院大学分校学長代理 齊伯 守

財団法人東亜同文書院

公爵 近衛 文磨 殿

今般東亜同文会ノ改組断行サル、由仄聞致候ニ就テハ、東亜同文書院大学ノ意向ヲ伝達致シ之方具現ノ一日モ速カナラシトヲ期シ度ク、茲ニ左記五項目ノ覚書ヲ提出致シ御考慮ヲ相煩申上候。

## 覚 書

## 一、本学ノ方針

本学トシテハ現ニ分校ニ集合シツ、アル本年度新入生、内地復員学生(約三百名、明春五百余名トナル見込)ノ授業継続、将来大陸ヨリ帰還スベキ外地新入生及復員学生ヲ温ク迎フベキ母校ノ存続ニ最モ重大ナル関心ヲ有ス。

## 二、応急処置

右ノ見地ヨリ分校ノ存続発展ニ飽クマデモ邁進努力スベク、今後ニ於ケル財政緊縮ノ為メニ府県費制度ノ実施方万一犠牲ニ供セラル、ガ如キコトアルモ、府県ニ代リテ広く全国ヨリ優秀ナル学徒ヲ募リ之ヲ給費生トシテ教育スルニ足ル資

金ヲ此際確立シ置クベシ。從來満鉄ヲ初メ外地関係会社等ヨリ派遣セラレ居ル給費生、或ハ戦災ニ依リ父兄ヲ喪ヒ、或ハソノ家計ニ子弟育英ノ余祐ヲ失ヒタル私費生ニ就テモ同様ノ用意ナカルベカラス。事变以來大陸ニ起居シテ貴重ナル思索ト体験トヲ重ネ米レル教職員(及ソノ家族)ニ就テ、蔵書其他ヲ上海ニ置キタルマ、内地ニ赴任シ居ル者、及現ニ困難ナル事情ノモトニ上海ニ在リテ将来帰航スベキ者ニ対シテ相応ノ方途ヲ確立シ置クコト緊急ナリ。

ソノ何レニセヨ国家ヨリノ補助金ニシテ当然本学ノ為メニ充当セラルベクシテ未ダ現地ニ送金サレズ從ツテ費消サレザル金額少カラザル今日、一応之ヲ学校経営ノ基金トシテ別途ニ確立シ置クコトヲ喫緊事トス。

右ニ「一応」ト言ヒシハ、文化国家平和国家ノ建設ニ当リテハ、今後、本大学ノ如キニ対シテ国家又ハ民間ヨリ一層ノ財政的援助アリテ然ルベシト考ヘラル、ニヨル。

## 三、理事選出ニ関スル要望

更ニ、新理事会(中樞機関)ニ対シテハ本学教職員ニシテ唯一人ノ理事モ選出シ居ラザル今日、少クトモ一名ノ理事ノ内地在住教職員中ヨリ選任サル、コト当然ナリトス。然モ、時代ノ新動向ニ応ゼン為メニハ別ニ若干名ノ本学ヨリノ参加者ヲモ増員スベク、更ニ大学教育ニ理解アル新時代人ノ一般又ハ常務理事ニ新任サル、コトヲ要望ス。

## 四、本学存続ノ意義

本学ノ性格ニ関聯シテ新事態ニ即応スルタメニハ宜シク解消スベシトノ論モ一部ニ生ジツ、アルヤニ仄聞スルモ、ソノ

論ノ当ラザルコト最モ甚シ。

或ハ軍探学校視サレ或ハ日本帝國主義ノ大陸進出ニ人材ヲ供給シタルノ故ヲ以テ解消ヲ主張スル論者アリトセバ、吾人ハ從來ノ日本ノ支配者ノ下ニ如何ナル機關ガソノ権力的利用ヲ免レ得タルヤヲ逆問セザルベカラズ。軍探学校視サレタルハ、本学方偶々大陸ニ存在セシ為メ右ノ利用ガ中国側ニ直接触目サレタルニ過ギズ、本学本来ノ使命ガ日華輯協ニ在リ中国事情ニ対スル不偏ノ理解研究ニアリタルハ、本院卒業生ニ知己ヲ有スル中国人ノ進ムデ認ムル所ナルベシ。事情ハ在華欧米宗教、教育機関ノ一般ニ就キテモ略同様ナルコトヲ敢ヘテ付言スル要モナカルベシ。

日本帝國主義ノ大陸進出ニ人材ヲ供給シタル非難ニ至リテハ、寧ロ内地大学ニソノ鋒ヲ向クベキナリ。蓋シ書院ノ卒業生ハ從來長ク所謂學生様タル官僚幹部ノ下ニ手足ヲ伸バシ能ハザリシ実状ニ在リタルコト周知ノ如シ。右ノ非難ニ反シテ、中国ヲ愛スル者中国ヲ知ル者トシテ本邦ニ於ケル對華与論ノ啓蒙是正ニ重大ナル役割ヲ果シ來リタル評論家ナドノ殆ド全部方書院出身者ナルコトハ大新聞社ノ東亞關係記者ノ陣容ヲ一瞥シテ明白ナルベシ。

最近ニ至リテモ支那事變以來本学方大陸ニ在リナガラ特ニ目醒シキ活動ヲナサザリシ事實ヲ以テ本学ノ無能無力ノ証左トシ進ンデ無用論ヲ唱フルガ如キ者アリトセバ、却テカ、ル事實コソ本学方困難ナル事情ノ下ニアリナガラ克ク大学トシテノ自由ナル立場ヲ可能ナル限りニ於テ堅持シ得タル何ヨリノ証明ナリト答ヘザルベカラズ。本学方「自由主義ノ温床」

トシテノ監視ヲ日本軍務当局ヨリ受ケ來リタルコトハ悲シキ事實ナルト同時ニ、一般國民ニ、又中国人ニ特ニ理解ヲ迫リタキ事實ナリ。

固ヨリ本学ノ努力足ラザリシ点モ少カラザルベシ。省ミテ忸怩タルモノナキニ非ズト雖モ、翻ツテ考フルニ、諸種ノ外的制約ノ取払ハレタル今後コソ本学ガソノ使命トスル所ニ自由闊達ニ邁進シ得ル時代ナリト信ズ。単ニ語学ヲ教フルニ止ラス、単ニ学理ヲ授クルニ止ラズ、更ニ隣邦各般ノ事情ノ教育研究ニ専任スル最高学府トシテノ本学獨特ノ存在ハ、假令不幸ニシテ現地存続ヲ認メラレザルニ至ルコトアリトシテモ、毫末モノノ意義ヲ喪失セルモノニ非ズ、タゞ從來官庁ヨリ強制セラレ誤解ヲ招キ易キ字句等ヲ学則ソノ他ヨリ抹殺スルコトハ当面ノ急務ナルベシ。

#### 五、今後ノ対策

今ヤ時局ノ推移事象ノ變化予断シ難キモノアリ。書院ノ現地存続ハ或ハ不可能ナラムカヲ恐れ、宜シク一日モ速カニ内地移存ノ大計ヲ確立サレ、基金ノ設定、校舍ノ選定等ニ邁進漏ナカランコトヲ期セラレタリ。本学モ亦ソノ要請ニ応ジテ全面的革命ニ着手スル用意アリ。

以上

〔東亞同文會史・昭和編〕より〕

池上貞一先生略歴

池上貞一（いけがみ ていいち）

一九一八（大正七）年八月二〇日

愛知県に生まれる。

一九四二（昭和一七）年三月

東亜同文書院大学予科二年中退

一九四四（昭和一九）年一月

日本医療団大府荘囑託（四五年六月まで）

一九四五（昭和二〇）年七月

東亜同文書院大学臨時講師（四六年一月まで）

一九四六（昭和二三）年九月

愛知大学予科講師

一九六一（昭和三六）年四月

愛知大学教授（法経学部）

一九六四（昭和三九）年八月

イギリス留学（六五年一月まで）

一九七六（昭和五一）年七月

図書館長（八〇年九月まで）

一九八五（昭和六〇）年五月

中国学術交流委員会委員長（八八年七月まで）

一九八八（昭和六三）年七月

中国留学（八八年一〇月まで）

一九八九（平成一）年三月三十一日

定年退職

四月一日

名誉教授



禮賢中学入学の時昭和6年9月

## 池上貞一氏に聞く

池上 ずっと体をこわしていたというような事情があつてね。

中国人の中にいたし、四六時中中国語を聞いているから、慣れはあるけれどもね、自分から、うまくなつてやろうという大志がなかったからね。萃編の中には難しい単語やら知らないのもたくさんあるわけですよ。ところが天津から来た他の連中はまあどつちかというところ、はりきつて来たわけだし、一生懸命覚えようとしたからね。まあ、そういう連中から見るとそういうことと言えるんじゃないかな。ただぼくなんか軽く見ていたとは思うけれども。しかし、私の場合は最初にガツチリやつていないわけだ。基礎をね。

昭和二〇年の終戦の年ね。あの国際法の神谷先生が、ちょうど内地に帰っていてね。昭和二〇年の新人生は、船がなくて現地に行けんもんですからね。内地で、勤労働員で呉羽紡績に行つたわけですが、本間さんから神谷さんが勤労働員隊の隊長になつて頼まれたのですね。そしたら私より少し後輩の愛知県人の書院生がやっぱりを悪くして帰っていましたね。その彼が、内地で療養したことを知っていて、ぼくが天津中目学院卒業で当然中国語がうまいと決めてかかり、神谷さんもそう思つていて、それで中国語の教師を、私にやつてくれんかというわけだね。ぼくも、療養所についておつても、きりがないからね。少しお国のために働こうかと思ひましてね。療養所の嘱託をやめたわけですよ、工場にでもいいからと、あてはなただけだね。やめて家に帰ると間もなくそういう話が来たわ

けです。工場に行つてやるよりは、まだその方がいいんじゃないかと思つて、それで呉羽に行つたんですよ。しかし中国語も非常に初歩的なものでも、教えるとなると、ただしゃべつていゝのとは違つてガツチリと理解していなければ駄目ですね。それから発音なんかも、きつちりやつていなかつたからね。慣れてはいてもね。

——そうすると、そのまま終戦ですか。

池上 そう。呉羽で終戦を迎えました。

——帰国、療養されて……。

池上 ぼくは別に同文書院をやめるつもりはなかつたけれども、私が療養所にいる時に、父が休学延期願でも出したのかな。あれ、休学にも期間があるでしょう。二年とかなんとかね。そんなこと、ぼくはなにも知らなかつたし、父がたぶん出したんだと思いますよ。そしたら、そのころ、本間喜一さんが学長になつていてね。ぼくは見たこともない本間学長の名義で除籍を命ずるといふ辞令が来しましたよ。二年経つても復学しないので、除籍にしたんでしようね。こつちも、それどころじゃなかつたからね。だから一年行つて休学し、除籍になつて、その後で同文書院の非常勤講師をやつたわけです。それから終戦になつて家に帰りましたが、九月ごろにまた呉羽に復員した書院生や新人生が集まり、そこでまた三か月ぐらいいいたかな。

——一九四〇年にお帰りになつてからずっとそのまま、日本で。

池上 そう。呉羽に行つてすぐ終戦になつて、で一度帰郷、また呉羽で同文書院をはじめたんだ、それで来いという連絡が

あつて、また行きましたが、そこで解散になったわけですか。

——呉羽には、かなりいたわけですか。

池上 いや、あまりいいですよ。あの、八月の終戦直後に、一度呉羽から引き揚げたんですよ、それで、復員した学生なんかが集まってきたからね、またやるんだってね。それから若干先生も増えてね、中国から帰ってきた先生もいるから。

——呉羽には学生は、相当おつたんですか。

池上 一〇〇名以上はいたですね。あつそうか、もつといたか。最初は同文書院の予科と専門部の一年生で二五〇名ぐらいでしょ。それから北京経済専門学校が全員だったか、とにかく一〇〇名くらいいたかな。それぐらいですよ。一度終戦で帰郷し、それで同文書院だけ、またやるんだといつて、先輩で復員してきた連中も集まつたりして。あれは、九月か、十月月だったかも知れません。それから、二月ぐらいまでやって、それで解散させられたのかなあ。

——呉羽って場所はどこですか。

池上 富山県。

——それは動員されて……。

池上 ええ、呉羽紡績には同文書院の先輩がいて、副社長をやつてたんです。そういう関係で。

——それから、どうされたんですか。解散になって……。

池上 マッカーサーの命令で解散になって、それで代わりに今度は豊橋に愛知大学ができることになって。中国語の教員が、三名要るのに、尾坂君も来る予定だったのが、法政大学が決まったもんだから一人空いてしまつてね。それで、私が拾われ

たわけです。

——豊橋に大学ができるっていう時に、先生はなにか関係が……。

池上 いや、関係していない。

——偶然に自分の故郷っていうか、そこに愛知大学ができたために。

池上 そうです。神谷龍男さんが愛知県にいて、ここに予備士官学校の跡があるということをお問さんや小岩井さんに伝え、向先生のもとで神谷さんが馬車馬的にかんぼつていたんですね。

——小岩井先生は、先生が書院に入学された時は。

池上 いなかった。

——教員じゃなかったんですか。

池上 まだいませんでした。本間さんも小岩井さんも。ぼくはだから愛知大学ができるまでは知らなかったんです。

——昭和六年以降っていうわけですね。

池上 若江得行先生が同文書院へ赴任する時は、ぼくと一緒でした。齊伯さんのお父さんもね。

——先生が入学される年に……。

池上 ええ。同文書院に赴任されたんです。

(このインタビューは、一九七六年三月に行った)

『大陸に生きて』(池上貞一先生に聞く)より)

## (一) 吳羽時代

法経学部教授 池上貞一

わたしに課せられたテーマは、愛大初期のころの思い出を書けということであろう。ところで愛大創設には、上海東亜同文書院大学を敗戦後の日本内地で再開しようとしたことが駄目になった結果、それに替わるものとして設立されたという経緯がある。そこで書院の内地での再開の準備的役割の一端を果たした「吳羽時代」のことについて若干の思い出を記させていただきたい。それは、吳羽がわたしの愛大に奉職するいとぐちにもなったからである。

昭和二〇年、敗戦の年の六月二〇日に、わたしは五年間いた大府の結核療養所（後の二年は嘱託として勤務）を出て、豊橋の実家に帰ることに決めていた。ところが、その二〇日未明、豊橋は大空襲を受け、市街のほとんどが灰燼と化した。もう実家も焼けてしまったのではないかと思ひながら、当日午後四時ごろ、わたしは豊橋駅に着き、一面焼野が原で方角も定かでない、地面がまだほてっている道路をさまよって、焼け残った実家に幸いにも辿りつくことができた。

わたしは軍需工場にでも働きにいかうかと思つて療養所を辞めたものではあったが、帰宅後間もなく、書院の新生活が渡航の船が相次ぐ撃沈でなくなつて上海に行けず、富山県の吳羽紡績で勤労働員に参加することになったが、中国語教師がないので来てくれないかという連絡を受けた。わたしは軍需工場より

もその方が長所を生かすことになると思ひ、書院大学子科の非常勤講師になることになった。

わたしは昭和六年三月、中国の青島にある日本小学校を卒業したが、その時点で、外務省は少年のころから中国の学校に入つて中国をほんとうに理解する人間を養成しなければならぬという主旨で、外務省文化事業部第三種補給生という「少年留学生」制度を設け、わたしはその第一期生として、同年九月、青島の禮賢中学校（四人組一派の康生、南開大学外事処長も同校出身）という中国人の中学に入学した。その年九月に満州事変が始まつたために、わたしは同校で中国の海軍士官から毎日のように軍事訓練を受けるはめになった。

その一年半後に、父親が内地に帰国したために、昭和八年九月には天津の中日学院に転校した。同校は書院と同じ東亜同文会の経営する中学（初級三年、高級三年）で、中国人学生のかかに若干の日本人留学生（文学部非常勤講師の尾坂徳司氏もその一人）がいた。東亜同文会は同文書院大学のほかに、天津中日学院、漢口の江漢中学（故若江教授も書院の前は同校にいた）、終戦の年には北京工業専門学校（文学部の川越教授の前任教）を設置して経営していた。

わたしは中日学院の寄宿舎に入ると、すぐに結核に感染し、爾来三十数年間、体が本調子ではなかった。昭和一二年には盧溝橋事変が勃発し、もともと中日学院を終えて中国の大学に学ぶ予定であったが、外務省の意向で東亜同文書院大学への入学を指示された。その上海では再び胸が悪化し、帰国して大府の療養所に入ったのであった。

話を元に戻し、昭和二〇年七月初旬ころだったろうか、呉羽紡績には書院予科、専門部、北京工專の内地で入学した一年生（現地で入学したものを除く）二百数十名が全国から集まった。隊長は書院の神谷龍男教授（本学の創設に参加、一時は国学院大学に行かれたが、再び本学客員教授になられ、昭和五七年逝去）であり、浅野巧美さん（本学の最初からの庶務課長）が事務責任者であった。少し遅れて若江得行教授も来られた。学生も教職員も全員が呉羽紡の寮に宿泊した。同工場ではベニヤ板を用いた木製戦闘機を試作中であつた。中国語の授業を少しやつたほかに、学生たちは仕事の手ほどきを受けていた。当時は食べ物が極端に不足していたが、工場の近くに一軒だけ小料理屋があり、呉羽に滞在していた伊藤忠社長の伊藤忠兵衛氏が二、三度招待してくれたことがあり、忠兵衛氏とその昔中国の奥地にまで商売に出かけた話を聞きながら、牛肉などの料理をごちそうになると、とたんに元気が出たことを思い出す。また富山市空襲の翌朝、神通川の川辺の砂上での死体焼却の煙を横に見ながら、トラックで富山市の清掃に出かけたこともあつた。学生の一人、二人が工場内にあつた固型葡萄糖を失敬したことから、工場駐在の軍人数名が怒鳴つてきたのに対し、神谷教授が負けずに怒鳴り返して、相手をたじろかせたことも思い出される。八月十五日の陛下の放送をわれわれも工場の広場で拝聴し、聞き取れなかったがどうやら戦争が終結したらしいことを知つた。伊藤忠兵衛氏が途中で困つた時には物々交換に使えといつて学生の一人一人にくださった綿糸二、三束を有難く受取り、学生たちは郷里に帰つていった。

以上が呉羽時代の前半であるが、同年十一月初めごろだったか、呉羽で書院を再開するから出てこいという知らせを受け取り、わたしも再び呉羽に出かけた。呉羽には書院の予科と専門部の一年生のほかに、軍隊から復員してきた上級生もかなり来ていた。学長代理には斎伯守教授（後に愛大予科教授、逝去）がなられ、ほかにも復員または帰国した教師一〇名前後が来られていた。授業はあまりやられていなかったように記憶するが、神谷教授は「支那研究部」の部屋を設け、そこには大野一石君（現教務課長）や愛知県人の学生がたむろしていた。二月のいつのことだったろうか、東亜同文書院大学の存続を認めないというマッカーサー司令部の通達を呉羽のわれわれも知つた。こうして二月の二〇日ころだったか、呉羽に結集した書院の教員も学生も呉羽を後に再び郷里に帰つていった。そのころ、東京の東亜同文会の建物である霞山会館（それを壊して、いまの霞山ビルが建つた）が米軍に接収される知らせが来たので、その際、霞山文庫（愛大創設時の蔵書となる）を取られないように疎開させるために、神谷教授に同道して大野一石君やわたしも、呉羽紡で用意してくれた大量の片面印刷された大版のザラ紙を包装用に持参して東京に赴いたのであつた。

〔愛知大学通信第四六号（昭和五九年二月一〇日）  
「私の追憶」より〕

## 愛知大学創設前後(一)

法経学部教授(兼任) 神谷龍男

この春、昭和五年四月一九日、愛知大学通信編集部之光松さんから、本間先生からの御依頼だということで、愛知大学創設のころの思い出を書いてもらいたいといつてこられた。本間先生からの御依頼であれば、書かないわけにもゆかず、お引き受けした。何しろ、約三〇年も前のことであるから、はつきり覚えていたものもあれば、忘却してしまったものもあり、おおよそ、月日はさだかでないものが多い。

## 一 呉羽の思い出

昭和二〇年五月、富山湾では「ほたるいか」のとれる頃、呉羽は青々とした緑にもえ、呉羽山は柔らかな緑でつまれていっていた。そこには、伊藤忠兵衛社長がきており、東亜同文書院の大先輩功刀さんが副社長をしていた。そんな関係で、東亜同文書院大学予科生、専門部生(昭和二〇年四月入学)を中心とした約四百名が学徒動員された。伊藤社長も暇をみては、よく学徒隊に話しにこられた。

そして、このあたり一面の水田に蛙の声がやかましくなり、夏草がおおい茂げるようになった夏の或る夜のこと(それは八月一日の夜のことになるのであるが)伊藤社長がゆかたがけて学徒隊に話しにきておられ、その最中、かねてより学生達は交

替で屋根に見張りを出していたが、西の空に金属性の音がきこえてきたと知らせてきた。いままで、そこにいた伊藤社長は、いつ、行ったのか、全くすばやく、姿を消していた。学徒隊は日頃、警防団との打ち合わせた訓練では、整列して、正門から避難することになっていたが、いざという時には、それでは間に合わないで、緊急の場合には、夫々、三三五五と工場の扉を乗り越えて避難するようにしていた。伊藤社長の逃げるのも速かったが、学徒隊の方も五分としないうちに、一人残らず、工場外に出てしまつて、警防団は学徒隊は一体、どこへ行ったのか、正門から出てこないのだからという。

これがB29による富山の大量襲撃であった(それは八月一日夜から二日午前〇時にかけての由)。なに街道といつたか、北陸街道を越して、たんぼの畦道に逃れついたら、その頭上を澄みわたる北陸の夜空にB29は編隊をつらねて。幸い、呉羽の工場はほとんど被害なく、一夜明くれば、また、三三五五と皆な戻り、元気のよい学生達は、ほとんど全員一睡もしないまま、爆撃をうけたばかりの戦災生々しい富山へ救援のためトラックで出掛けていった。今、同窓会の名簿をみると、そのときの子科、専門部の消息不明者が実に一四七名の多数にのぼっているのが目につく、どうしたことかと思うのである。

呉羽での印象に強く残っている人に猪瀬君がいた。栃木県の県費生で、元気な彼と神通川の橋を語り歩いた。また、昭和一七年、愛知県費生として予科に入学、途中、帰国して、そのまま渡航できず、郷里(吉浜)にいた加藤敏夫君も呉羽に特別参加して助けてくれていた。終戦後までいて、八月の終り頃には

郷里で静養する身となり、その年の暮れ、惜しい哉、不埒の客となつてしまった。また、呉羽には例外的に参加していた若干の人達がいた由。その一人が殿岡君で、彼は昭和十九年の予科入学、東京からきていて、情報にくわしかつた。東京方面に関する情報は主に彼から得ていた。

呉羽は一〇月は快晴の秋日和が続き、呉羽山山麓には、みばはともかく、とてもおいしい水島柿が実のつた。一月からは天候がくずれ、みぞれが多く、毎日のように雪まじりの雨で、曇天が続き、寒くなつていった。そして、いつしか二月となり、本部の東亜同文会がどうなつているか、行つてみようということになり、私、浅野さん(元愛知大学事務局長)その他、二、三名、その名前は思い出せないが、計四、五名で、昭和二一〇年一月上旬から中旬にかけ、急ぐ気持で上京した。戦後間もなくのことで、引揚者でこつた返えず、足の踏み場もない北陸線で。

そして、同文会では、二階広間の長椅子に、オーバーを着たまま、ごろ寝した。その頃、同文会は、すっかり人がいなくなつてしまつており、昼間、牧田理事一人のみえるだけくらいで、あとは庶務の佐藤さんと用務員一人といつたくらいであった。同文会に着いた最初の晩だと思ふ。冬のこと、もう暗かつた。用務員の人が進駐軍の将校がきたといつて知らせた。正面玄関入口は閉じていたので、裏口からアメリカ軍の将校が入つてきており、英文の書類を渡していった。それが進駐軍による東亜同文会建物接収の書類であつた。それをみると、椅子、テーブルなど移動してはいけないものが列挙してあつ

た。なぜか、ブックス(Books)、本は除かれていた。それならば、書物は移動してよいと判断し、翌朝、牧田理事がみえるや、取り急ぎ、そのことを申し上げ、即日、同文会三階にあつた霞山会の和漢洋の事書三万冊余りを書架共に、三階よりおろし、トラックに積み込むまでのお手伝いを皆んなで協力した。

人手のないときであり、一刻をあらそうときであつたから、この苦しい労働は大変であつたが、お役に立つたことだろう。かくて、これらの書物は無事、成城の牧田理事の家に運ばれた。同じ頃、進駐軍の接収命令は、同文会の向い側の満鉄東京支社にもあつた筈で、そこにあつた何十万冊かの書物については、その冊数が余りに多くて、手配する人と暇がなかつたのだろうか、進駐軍に没収されてしまつた。霞山会の三万余冊は右の次第で、没収されずにすんだが、あのときタイムリングよく運び出していなければ、やはり没収されていただろう。これらの書物は、後にとつても、早くも翌年、昭和二十一年、愛知大学設立の文部省への申請に、基礎的書物となつたことだろう。

昭和二十一年六月一九日 神谷龍男

### 執筆者紹介

神谷龍男教授(兼任)

(現国学院大学教授)

先生には、現在本学教授(兼任)として国際法を担当していただいている。

本学創設後は、永らく専任教授として(初代図書館長)として学生指導に當つていただいたが、先生について特に触れてお

かなければならないことは、創設時前後、先生がおられなければこの地に本学が創設されていなかったことであろう。

本欄で、先生が「追憶」として、つぎつぎと明らかにされていく予定とお聴きするが、それは、二点ある。一つは、大学開設にとつて缺かされない蔵書を大量三万五千冊入手するという橋渡しの役をしていたことである。二つには、現豊橋校地をその候補地として積極的に推薦されて、借用の運びの労をとられたことである。

今にして思えば、感無量であり、この「追憶」に記されることごとくが脳裏に甦って来る。

〔愛知大学通信第一〇号（昭和五一年八月一日）「私の追憶」より〕